

文化生活部

bunka@kumanichi.co.jp
TEL:096-361-3181 FAX:096-361-3290

文化 | Culture

『陽光』(松嶋圭、梓書院10月)は、老岐島生まれの精神科医による初の小説集。島にゆかりがあった人たちが診療所を継いでいく家族の悲喜こもこもを描いた16編の短編が鎖のようにつながっている。出征していた中国から島へ帰還し、戦死した兄の妻と結婚した男96歳。故郷を離れて島出身の日本人と結婚した後も残してきた家族へ仕送り続けたフィリピンのお農出身の女。少年の頃診療所まで裸足で2時間かけて薬瓶を取りに行っていた男の「よう歩きよった」89年の人生。2度の再婚で結ばれた夫が急死した後、跡取り息子を交通事故で失った大伯母の言葉「堪忍しちおくれませ」神様!。戦争、家督相続という権利と義務、不慮の災難によって人生を翻弄された人たちの姿が語り口を変えて紡ぎ出されている。対馬海峡と玄界灘の荒



「『QQQQ』に収録した詩は、かなり時間をかけた。何度も書き直しました」と話す和合亮一さん
=福島県浪江町

散文月評

古江 研也

がどうの言葉をかみしめながら生きてみます私なりに(さだまさし)作詞・作曲「秋桜」といふ思いを語った母恋のエッセー。混乱と貧困の中で家族を支えた母を描いた自伝的小説『母 オモヒ』(2010年)から約10年。軽井沢の高原へ引っ越し、晴耕雨読の日々を送っている著者は、移

波に洗われる島とそこに生き人間の記憶。それは昭和の足跡ともいえよう。日の当たることが少なかった人たちの墓碑銘を小説という形で現出させ、そこに「陽光」という温かい眼差しを注いだ短編集。『母の教え』(姜尚中、集英社新書 10月)は、「あり

ろいゆく四季に触れながら人生の春夏秋冬を振り返っている。古稀が近づくとつれ母親の言葉が自分の土台となっていることを体感するようになったという。「何とかなるほい」が口癖だった母が「もうよかばい」と穏やかな最期を迎えるまでの、在日史ともいえる人生が回想されている。

「陽光」

「ころころするからだ」

著者が愛読する夏目漱石に倣えば、「詮ずる所、人間は閑適の境界に立たなくては不幸だ」「一思い出す事など」といふ気持ちにさせる。『JUN JUNKOからだ』(稲葉俊郎、春秋社 9月)は、循環器内科医が説く心と体の養生指南。西洋医学の因果論だけでは心身に起きる様々な

震災から7年



災から7年以上の歳月が過ぎ、今こころは草ぼうぼうで、静寂に包まれている。静かな不条理の恐怖です。広い範囲に除染廃棄物を詰め込んだフレコンバッグが積みまれ、送電線の鉄塔がむなしく連なる。鉄塔を巨人に見立

やすい詩を書く詩人とみなされてしまった。その反動もあって、今度は徹底的に時間をかけた。意味がまとまらうとすると、それをいちいち壊してまた書く。それを繰り返しました。中原中也賞を受けた第1詩集「AFTER」から20年。今夏、現代詩文庫から「和合亮一詩集」と「続・和合亮一詩集」が同時に出版され、震災前後の詩業がまとまった。「自分の持っている詩の技術、言葉の力でこの世界とどこまで渡り合えるのか。今後とも勝負を挑み続けたい」

老岐島に生きた人間の記憶 心身の養生を多面的に指南

原理が働いており、命の全体性を取り戻す生活習慣こそが予防医学の面からも有効だと説いている。個体食、液体食に加えて気体食を紹介する一方で医療と芸術の共通点を明らかにするなど、その内容は著者のブログと同様に多方面にわたり刺激的である。うま

現象を捉えきれないと考え、いのち・言葉・食・体育などの視点を通して医療を多面的に考察している。妻の出産に立ち合い、「人は命がけで生まれてくる」ことを実感できたことがその原点にあるという。約60兆個の細胞からなる人間の「いのちが持つ原初の力」には、競争ではなく協調

「安全運転義務違反」

を戦後世代が引き継ぐ話へと展開していく。ダイナミックな構想だが、骨格となる物語の直前で終わっている点が惜しまれる。『安全運転義務違反』(まえだかずき、同)は、交通事故を起こしたその後を描いたもの。信用金庫に勤めていた宏は、バイクで帰宅中に自転車に乗っていた高校生の美穂と衝突し、負傷させしめた。相手の飛び出しが原因と思っ

短 信

◇評伝「芭蕉」にドナルド・キーン賞 松尾芭蕉ら近世の俳人や作品に関する評論が対象の第3回ドナルド・キーン賞(埼玉県草加市主催)は、大賞に栗田勇さんの評伝「芭蕉」(上下、祥伝社)を選んだ。賞金は50万円。優秀賞、佳作は該当なしだった。ドナルド・キーン賞で大賞の選出は初めて。授賞式は来年5月

に草加市内で開かれ、黒田長谷川権さんは連名人と言ってもいい著識と、自らの若い時を重ねた「旅人芭蕉」を重ねた。となく世俗的なみ焦点が当てられがの芭蕉観には見向き筆態度がうかがえるだ」とのコメントを。◇「天文学と印刷学の進展に大きな役た学者と、その書物

●月刊文芸誌「詩と真実」(834号) 小説は紫垣功「天守閣炎上」。明治10年の西南戦争時の熊本城炎上を巡って、その「真相」を小説に仕立てた。

郷土 雑誌